

脳神経外科領域において分離された *E. coli* の ESBL 産生性とフルオロキノロン系抗菌薬に対する感受性

¹東邦大学医学部看護学科 感染制御学、²医療法人 医仁会 中村記念南病院 薬剤部

○金山 明子¹、山田 和範²、小林 真皓¹

【目的】近年日本において ESBL 産生 *Escherichia coli* の分離頻度が増加し、そのうちフルオロキノロン系抗菌薬(FQ 薬)に耐性を示す割合が高い傾向にあることが報告されている。本研究では一般的に抗菌薬耐性菌の占める割合が多い脳神経外科領域における入院患者から分離された *E. coli* を対象に、ESBL 産生株の頻度および FQ 薬に対する感受性を調査した。

【方法】2011年3月から2012年5月までに中村記念南病院の脳神経外科病棟に入院中に各臨床材料の培養検査により分離された *E. coli* 80 株を対象とした。ESBL 産生性はクラバン酸を用いた CLSI のディスク拡散法により判定した。FQ 薬は levofloxacin (LVFX) および sitafloxacin (STFX) を用い、各薬剤の MIC を CLSI に従った寒天平板希釈法により測定した。

【結果】*E. coli* 80 株に対し ESBL 産生性を調査した結果、20 株 (25.0%) が ESBL 産生株であり 16 株は泌尿生殖器検体から分離された。MIC が $\geq 4 \mu\text{g/mL}$ を示した LVFX 非感受性株は全体の 33.8% (27/80 株) の株に認められ、ESBL 非産生株では 16.7% (10/60 株)、ESBL 産生株では 85.0% (17/20 株) であった。ESBL 産生株における LVFX の MIC₅₀ および MIC₉₀ はそれぞれ $8 \mu\text{g/mL}$ および $32 \mu\text{g/mL}$ を示し、STFX では両者とも $1 \mu\text{g/mL}$ であった。

【考察】本領域の患者から分離された *E. coli* において ESBL 産生株は 25% の高い頻度で分離された。LVFX に耐性を示す株は ESBL 産生株の 8 割以上と明らかに高率に認められた。STFX は LVFX 耐性株においても低い MIC を示し、LVFX 耐性株に対しても有効である可能性が示唆された。

東邦大学医療センター大森病院における腸内細菌のイミペネム (IPM) に対する感受性動向

¹東邦大学 医療センター大森病院 臨床検査部、²東邦大学 医療センター大森病院 感染管理部、³東邦大学 医学部 微生物感染症学講座、⁴東邦大学 感染症高度統合解析講座

○村上 日奈子^{1,2}、吉住 あゆみ³、山口 恵三⁴、石井 良和³、館田 一博^{1,2,3}

【目的】2011年に CLSI M100-S21 において腸内細菌のカルバペネム系抗菌薬の判定基準が下げられた。今回我々は、当院における腸内細菌の IPM に対する感受性の年次推移について調査した。【対象と方法】2006年1月～2011年12月の6年間に東邦大学医療センター大森病院において臨床検体より分離された *E. coli* 9047 株、*Klebsiella* 属 4613 株、*Citrobacter* 属 844 株、*Enterobacter* 属 2418 株、*Serratia* 属 1086 株、*Proteus* 属 688 株、*Morganella* 属 394 株を対象とし、薬剤感受性試験はフローゼンプレート栄研およびドライプレート栄研を用いて CLSI に従った微量液体希釈法で MIC を測定した。【結果】*E. coli* および *Klebsiella* 属では大きな年次変化は認められなかった。*Citrobacter* 属では2009年まで MIC $\geq 2 \mu\text{g/mL}$ を示す株は認められなかったが、2010年4.9%、2011年6.2%と増加傾向を認めた。*Enterobacter* 属では年によってばらつきが認められたが、2008年より MIC $\geq 32 \mu\text{g/mL}$ を示す株が 0.2%～1.0%存在した。*Serratia* 属では2008年より MIC $\geq 2 \mu\text{g/mL}$ を示す株が増加傾向にあり、2008年3.1%、2009年5.7%、2010年11.3%、2011年21.4%であった。*Proteus* 属では2008年より MIC $\geq 2 \mu\text{g/mL}$ を示す株が2008年26.7%、2009年28.0%、2010年55.5%、2011年79.7%存在し、特に2010年以降増加していた。*Morganella* 属では6年間全て MIC $2 \mu\text{g/mL}$ を示す株が半数以上を占めていた。また、2010年では MIC $\geq 4 \mu\text{g/mL}$ を示す株が 17.2%認められた。今後さらに年を遡り、解析を行う予定である。